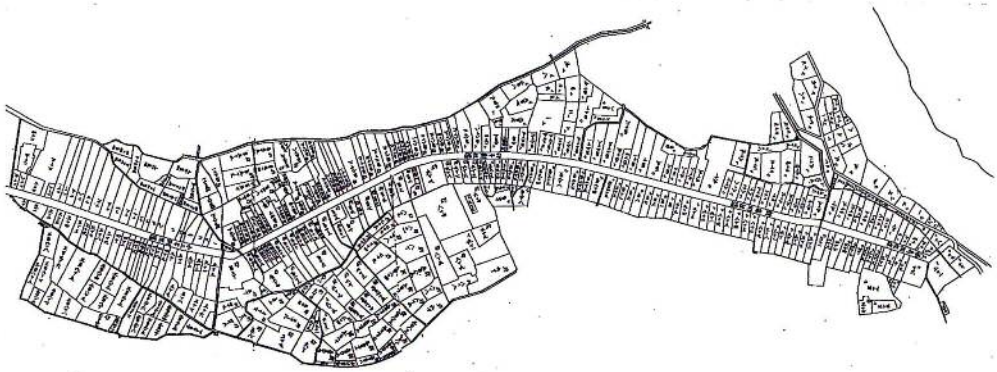
川崎町と南河原村の字名



平成25年3月

川　崎　市

目次

はじめに　3

江戸初期に誕生した川崎宿　4

堀之内村の字名　6
　堀ノ内村字図　6

川崎町以前の町村　10
　久根崎町　10
　新宿町　10
　砂子町　11
　小土呂町　11
　川崎町四ヶ町字図　12
　四ヶ町関係図（カラー版）　13
　川崎町全体図（カラー版大正８年）　14

南河原村の字名　22
　南河原村字図　23

町名の変遷表　26

まとめ　28

はじめに

日本地名研究所は川崎市の委託事業として、『川崎の町名』『川崎地名辞典　上・下巻』を発行した。それに先立ち、川崎市内の旧村の地名悉皆調査を行った。基本資料に『新編武蔵風土記稿』の記載内容の分析と小名の現在地等の確認作業と同時に、現地調査が行われた。

その中で、現川崎区及び幸区の南河原村の字図が十分に確認できないまま、調査が終了し、現在に至っている。その原因は、関東大震災や川崎大空襲による資料の散逸が主な理由とされてきた。

今回、日本地名研究所の悉皆調査にあたって収集された諸資料をもう一度整理し、補充することで空白地域の字図の復現や近隣町村の関係を明らかにしたいと考えた。

実は、この調査のきっかけは一研究者の問い合わせから、始まった。『川崎地名辞典』に堀之内村「上蒲原耕地」「下蒲原耕地」と中島村「蒲原耕地」の記載があるが、『新編武蔵風土記稿』の方位の記載内容と矛盾しているとの指摘であった。その時、所員から「堀之内村」の字図があるので、確認したらとアドバイスをもらった。無いと思っていた資料の存在を知り、個々の字図を繋げて堀之内村の全容が分かってきた。堀之内村の飛地と言われる所以や南河原村と南河原耕地の意味も解明できそうだと思った。

ところが、肝心の南河原村の字名が字図と一致した資料が確認されていないこともわかってきた。そこで、今まで収集されて資料の中から、具体的事実を探り出し根拠付けることで、完全ではないが全体像が見えてくるのではないかと考えた。

明治 22 年に堀之内村を含む 5 ヶ町村で川崎町が誕生するが、江戸時代の村支配の複雑さから、村境など不明なことが多々ある。三輪修三氏の著書『東海道川崎宿とその周辺』の載る「東海道川崎宿全体之図」（森家文書）は川崎宿の全体を知る、画期的な資料であるが、村域がわからない。そのような中、川崎町の字図が見つかり、それぞれの村との関係も解明できそうな目度がたった。

今回報告する内容はそれらを繋ぎ合わせたものなので、全てが事実というところまで至っていない。関係する方々からさらに資料等の提供を頂いて明らかにしていく一歩としたい。

なお、大師村と田島村についても並行して調査しているが、未解明な部分が多く継続調査をして、現川崎区の全容を明らかにしたい。

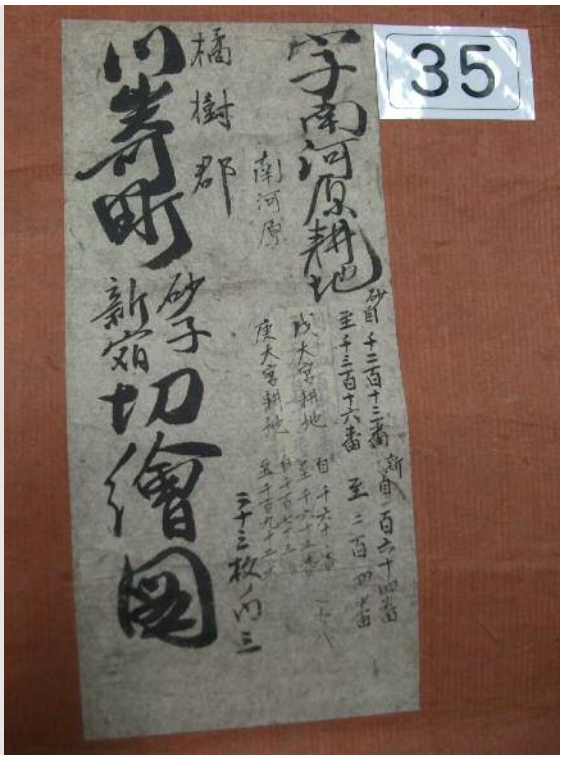
表記方法として、旧村の単位と字名とが複雑に絡んでいるので、同じ内容を他のページに重複して記載することになるので、了解ねがいたい。

江戸初期に誕生した川崎宿

『川崎地名辞典』に各旧町村の字名に重複があり、他の町村ではありえない表記が見られた。どこの村が主体になった土地なのか。どうして、このようなことが起こったのか、説明ができなかった。明治 22 年に川崎宿４ヶ町と堀之内村が統合して川崎町となるのであるが、その前に「小土呂町」「砂子町」「新宿町」「久根崎町」が存在し、その中に小字があったことになる。

明治７年の地租改正を前に、字名と地番が打たれ町村の把握がなされて、神奈川県庁に報告されているはずである。

今回の字図の分析で、川崎宿として字名が打たれ、それを４ヶ村の支配に分割していたようである。字図のなかに、「シ」新宿、「ク」久根崎、「小」小土呂、「イ」砂子、「砂子下」「大宮」などの記号が一画毎に打たれている。



上の資料は横浜法務局に保管されている川崎町砂子・新宿切絵図字南河原耕地の表紙

『川崎市史・資料編３近代』No204 に大正５年８月　川崎町第一耕地整理組合の測量設計願に「地区ノ所在地　川崎町堀ノ内字宮前耕地・下蒲原耕地・東田耕地・貝塚耕地、同砂子字東田耕地・古屋敷耕地・元木耕地・見染耕地、同新宿字古屋敷耕地・見染耕地・東越耕地・東田耕地・貝塚耕地・元木耕地、同小土呂字古屋敷耕地・元木耕地・貝塚耕地・見染耕地・東越耕地、同大島字向耕地」とある。このように、同じ字名が旧村に重なっていることが分かる。

また、安永元年（1772）の『川崎年代記録』に「当所沼由来」の項に、「矢向沼続市場村尻手下、南河原村下より砂子町田地、新宿町分、堀之内村田地、右五ヶ村入会ヲ流レ、砂子・小土呂両町を堤ニ悪水堪え」とあり、地元では鷸沼と呼ばれた大きな沼があった。「右沼小土呂町をこへ、往還通りより池田耕地新宿分、東之腰どぶ通り、堀之内、中嶋、久根崎分蒲原耕地、何レも地窪之場、是より玉川迄流れ通りニ相見へ、殊ニ往古北条時代北川崎と有之、全ク玉川之古敷ならん歟、しかと知れかたし」とある。町村の田地や分など耕地が複雑に配置していることを物語っている。

川崎宿の形成については、江戸初期の慶長６（1601）年、東海道の駅制では川崎宿は存在しない。元和９（1623）年に、伝馬宿として砂子・久根崎が東海道の宿駅となった。寛永４（1627）年に新宿・小土呂が宿に編入され、４町で宿場を構成することになった。また、寛永５（1628）年新宿に田中兵庫本陣が設けられ、その後砂子に佐藤惣左衛門本陣と惣兵衛中本陣が設けられたという。４町が同時に宿駅にならなかった理由は分からないが、数年で宿駅となっている。久根崎は渡河点であり、上船・下船の重要な役割がある。新宿は砂子・久根崎に対しての新宿である。砂子・新宿は久根崎・堀之内・小土呂を割いてできた町ではないか。

天正 20 年（1592）年に代官頭伊奈備前守による検地が行われ、山王社（現・稲毛神社）の社領 20 石が安堵された。この山王社について、「川崎宿鎮守山王宮由来之事」（森家文書・年不詳）に「当宿鎮守大権現之儀は、古来より堀之内、渡田村、大島村、川中島、稲荷新田、小土呂村、久根崎右七ヶ村之惣鎮守也」とある。ここには、砂子・新宿の地名はない。

先に触れた川崎宿の形成について、『新編武蔵風土記稿』では、「相伝ふ昔は今の宿内、大抵砂子、久根崎二村の地ならしが、御打入の後長谷川七左衛門長綱承にて町の地割を改め、人馬の役を命ぜり、……」とある。しかし、これも諸説あり、特定はできない。砂子という小名は当然存在していたと考えてよい。

石高の推移	武蔵田園簿	元禄郷帳	天保郷帳	旧高旧領取調帳
堀之内村	274 石 7 斗 2 合	341 石 7 斗 3 升	348 石 1 斗 8 升	348 石 1 斗 8 升
久根崎町	168 石 1 斗余	199 石 7 斗余	210 石 5 斗余	210 石 5 斗余
新宿町	304 石 7 斗余	373 石 6 斗余	375 石 3 斗半余	376 石余
砂子町	415 石 8 斗余	415 石 7 斗余	436 石 7 斗余	―
小土呂町	341 石 8 斗余	306 石 9 斗余	307 石余	―

上の表は川崎町の５ヶ町村の石高の推移である。用水の整備確保がなされて、元禄期以降はほぼ同じ経過をたどっている。町村によって石高に大きな差があり、田畑の占める割合を示している。砂子町・新宿町に対して小土呂町・久根崎町の占める割合が少ない。この表では分からないが、上田・中田・下田の割合にも関係がある。

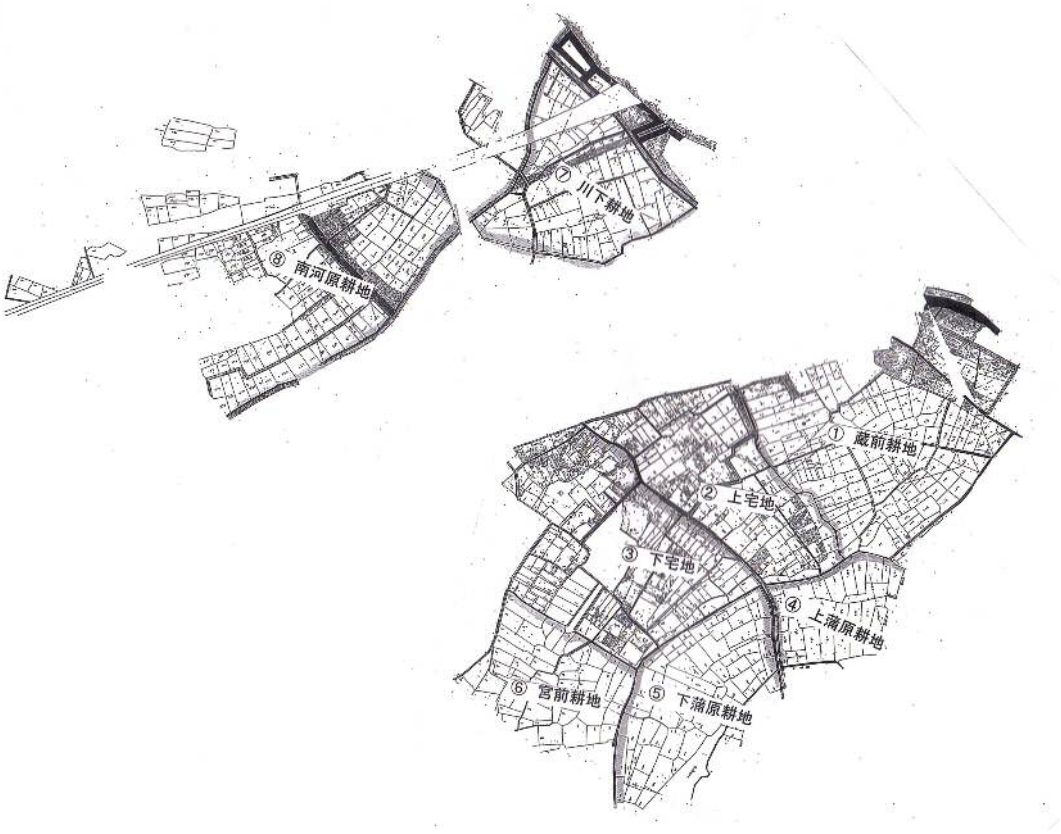
堀之内村の字名

堀之内村

堀之内村は、平安後期に秩父流平氏の河崎氏がこの地に住して河崎庄を支配したという。堀之内の地名は、その館を囲む堀があったことに因むといわれている。その館の地付近と思われる辺りに川崎山王社（現在の稲毛神社）が位置付けられている。

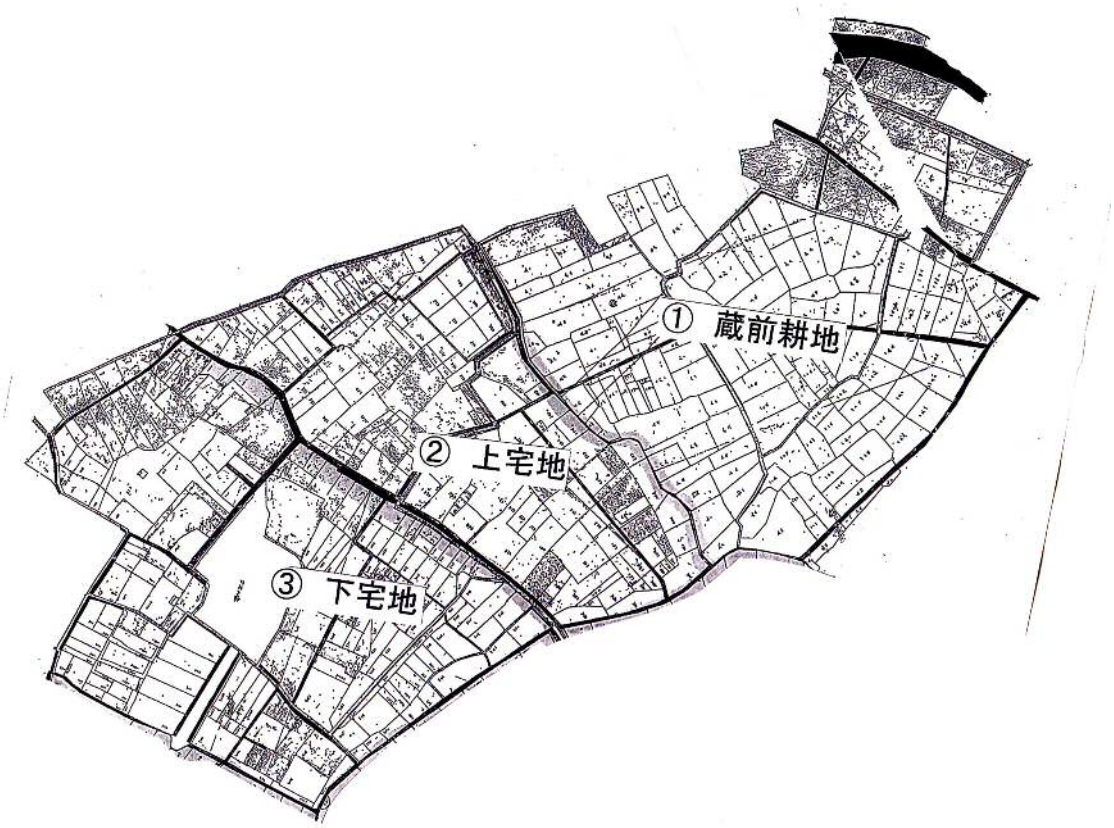
『新編武蔵風土記稿』には小名として、蒲原耕地・宮前耕地・川下耕地の名が載る。明治初期の字図には、宮前耕地・蔵前耕地・上蒲原耕地・下蒲原耕地・川下耕地・南河原耕地・上宅地・下宅地と８つの字が存在することが分かった。地番を追っていくと次のようになる。

蔵前耕地（1～147 番地）
上宅地（148～275 番地）
上蒲原耕地（276～305 番地）
下宅地（307～478 番地）
宮前耕地（479～541 番地）
下蒲原耕地（542～627 番地）
川下耕地（628～747 番地）
南河原耕地（748～890 番地）



① 蔵前耕地（クラマエコーチ）

久根崎町に蔵後耕地があり、久根崎・新宿宿の地続きに位置し、多摩川の水運や東海道の荷の積み出しと関係がありそうな字名である。現在の本町１・２丁目、旭町２丁目一部、富士見１丁目・川崎競馬場、堀之内にあたる。国道 15 号線が中央を通る。



② 上宅地（カミタクチ）

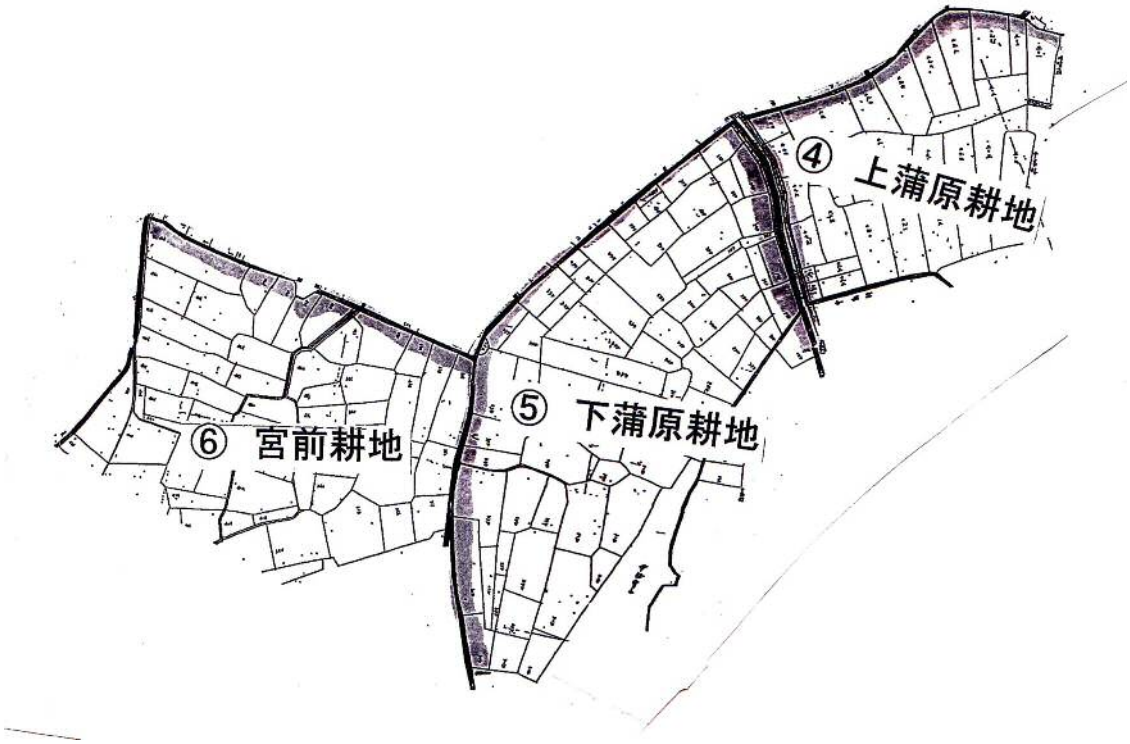
③ 下宅地（シモタクチ）

上宅地と下宅地がある。下宅地の中央に山王社（稲毛神社）があり、堀之内村の中心にあって、集落が多く存在し、川崎宿と地続きであることから、耕地ではなく宅地という町屋の字名になったのではないか。上宅地は現在の堀之内町、下宅地は現在の宮本町と榎町にあたる。稲毛神社の敷地の多くが国道 15 号線により削られた。また、堤外耕地や蔵後耕地などの飛地地番の多くが上宅地番地である。

④　上蒲原耕地（カミカンバラコーチ）

⑤　下蒲原耕地（シモカンバラコーチ）

堀之内村には上蒲原耕地と下蒲原耕地がある。また、中島村に蒲原耕地（カバラコーチ）があり、上・下蒲原耕地と繋ぐ形で存在したと考えられる。現在の富士見１・２丁目西側、宮前町に位置する。この一帯は湿地で水捌けも悪く、大正４年に富士瓦斯紡績が進出するまで、荒野であった。そのようなところから、蒲（かば・がま）の原と付いたのであろう。その後競馬場や富士見公園として整備される。大正 11 年の耕地整理後の榎町の殆どが下蒲原耕地にあたる。

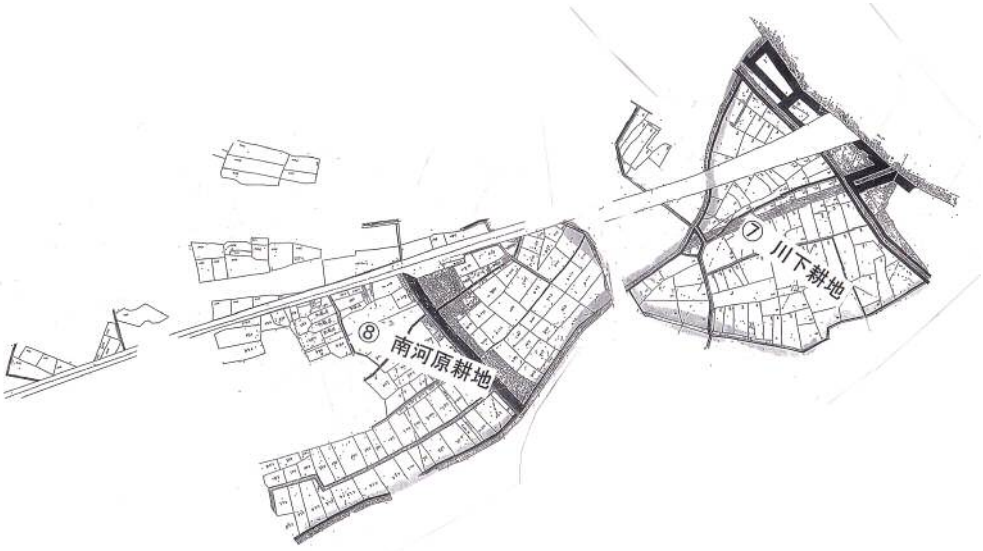


⑥　宮前耕地（ミヤマエコーチ）

山王社の参道の先に位置付くところから、宮前耕地の字名が付いた。現在も宮前町の西半分と東田町の東側国道沿いの地域である。地名として残った数少ない字名である。妙遠寺は戦後の区画整理の際に東田耕地から現在地に移転した。川崎区役所や川崎市消防局川崎消防署は宮前耕地にあたる。宮前小学校の校庭の西側が宮前耕地、東側は下蒲原耕地にあたる。

⑦ 川下耕地（カワシモコーチ）

川崎宿を挟んで、現在の本町１・２丁目、駅前本町、堀川町（ソリッドスクエア地域）にあたる。なぜ川崎宿を挟んで飛地状態になったのかというと、前段で述べたように、江戸時代以前は新宿・砂子の多くは堀之内村であった。そこを割いて川崎宿を構成したため分断されたと考える。新宿は砂子・久根崎宿の後にできたことを意味する。川下耕地の字名は多摩川下流という意味だろうか。小字など残っていないのでわからない。堀川町の名称の由来は不明となっているが、堀之内村の川下耕地に生まれた町であるところから、堀川町としたのではないか。旧堀川町は現在の駅前本町や本町１・２丁目を含んでいた。古川通からの用水堀が東田耕地内を流れ、川下耕地から多摩川に落とされていた。



⑧ 南河原耕地（ミナミガワラコーチ）

堀之内村の南河原耕地ということで、南河原村とは違うものである。川崎町新宿・砂子にも南河原耕地が存在するので、さらに混同してしまい注意を要する。どれもが、南河原村に接続する地域であったり、深く侵入したり、飛地を形成していることなども特徴である。堀之内村の南河原耕地は、砂子町の西にあたり、川崎宿を挟んでやはり飛地状態にある。現在の駅前本町、日進町、飛地として堀川町、大宮町、柳町に一部がある。

８つの字名について述べてきたが、堀之内村の全体について考えてみたい。この字図から、堀之内村は江戸時代以前には地続きの村であったことは間違いない。川崎宿が形成される中で、分断せざるを得なかった。その後も関係村として、常に川崎宿４ヶ町と行動を共にしている。明治 22 年この５ヶ町村によって川崎町が誕生した。明治の地割図で新宿・砂子が広く土地を有しているが、江戸時代初期のころはわからない。そのことを抜きにしても、堀之内村は広く土地を有していた。字境には用水や排水路が通っており、主要な道は川崎宿へと繋がっている。

川崎宿【川崎町以前の町村】

前段でも述べたが川崎宿の４町の字は複雑に絡んでおり、一つずつの町の字を説明しても、逆にわからなくなってします。そこで、字名を解説しながら、町の関係を述べてみたい。先に各町の字名と地番を列記し、全体把握をしてみる。番地が飛んでいるところもあり、完全ではない。他の村の飛地であったり、耕地整理の中で欠番になったりした可能性もある。

久根崎町

久根崎（くねざき）の地名の由来については定説がなく、多摩川の流れに沿う形状からその土手の前（さき）という意味であろう。またクネには境という意味もある。荏原郡と橘樹郡の郡境の多摩川の前とする意味か。字は５ヶ所にあり、耕地としてはまとまった地域を構成している。

宿裏耕地（1～22 番地、643 番地）
堤外耕地（23～200 番地、644 番地）
蔵後耕地（201～296 番地）
寺後耕地（297～475 番地）
寺前耕地（476～642 番地）

新宿町

新宿（しんしゅく）の地名は、砂子と久根崎に宿ができ、その後にできた宿ということで新宿となった。全国の新宿にその例を見る。字は寺前・西原耕地を除く 14 ヶ所に及び宿裏耕地を中心に川崎町全体に耕地を有している。

宿裏耕地（1～163 番地）
南河原耕地（164～272 番地）
堤根耕地（288～299 番地）
古川通耕地（300～332 番地）
元木耕地（333～399 番地）
見染耕地（400～481 番地）
貝塚耕地（482～484 番地）
古屋敷耕地（485～495 番地、728 番地）
東越耕地（496～556 番地）
東田耕地（567～586 番地）
堤外耕地（592～627 番地）
蔵後耕地（628～693 番地、711～717 番地）
寺後耕地（718～726 番地）
池田耕地（727 番地）

砂子町

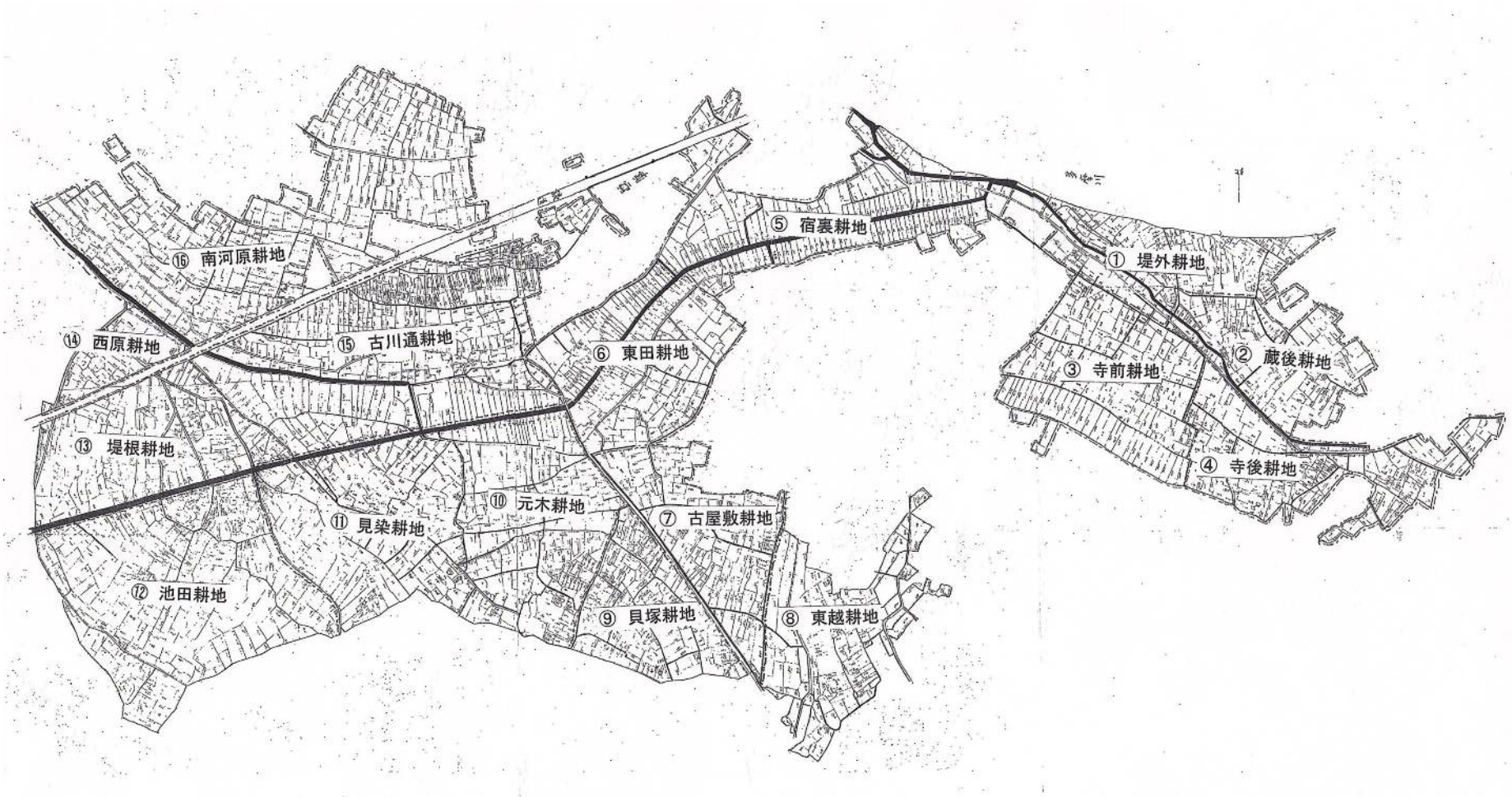
砂子（いさご）の地名の由来は、多摩川の砂州の上にあり、多摩川河口に寄洲が形成され、その砂や砂地の地形をイサゴと呼ぶことから、砂子と付けたと思われる。横浜の磯子なども同様の地名と考えられる。字は 12 ヶ所に及び、東田・宿裏耕地を中心に古川通・南河原耕地など川崎町全体に耕地を有している。

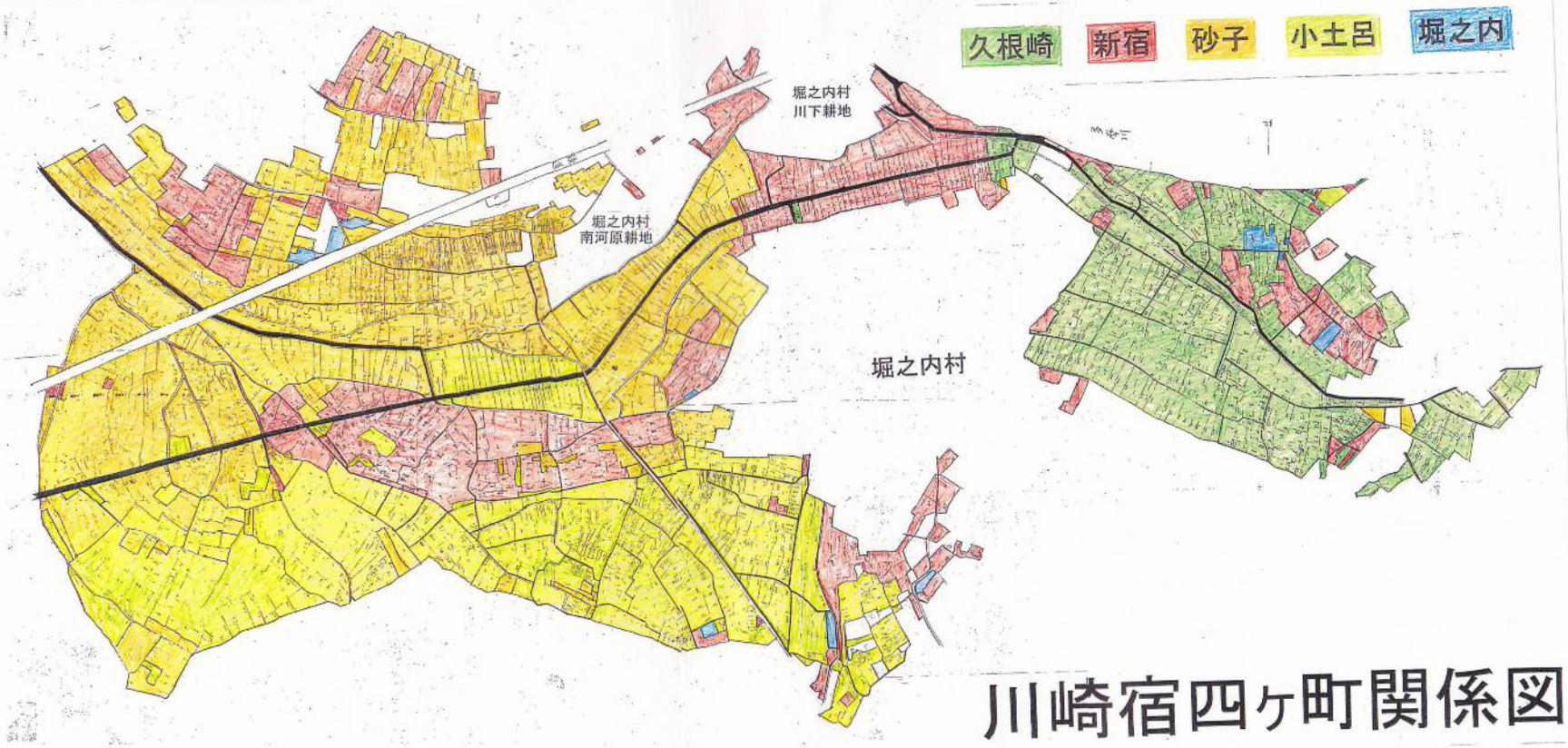
宿裏耕地（1～9 番地、186～209 番地）　　＊10～15 番地欠番
蔵後耕地（16 番地）
寺後耕地（17～19 番地）
古屋敷耕地（20～46 番地）
東田耕地（47～185 番地）
古川通耕地（210～642 番地）
見染耕地（643～650 番地）
元木耕地（651～677 番地）
池田耕地（678～827 番地）
堤根耕地（828～995 番地）
西原耕地（996～1060 番地）
南河原耕地（1061～1316 番地）

小土呂町

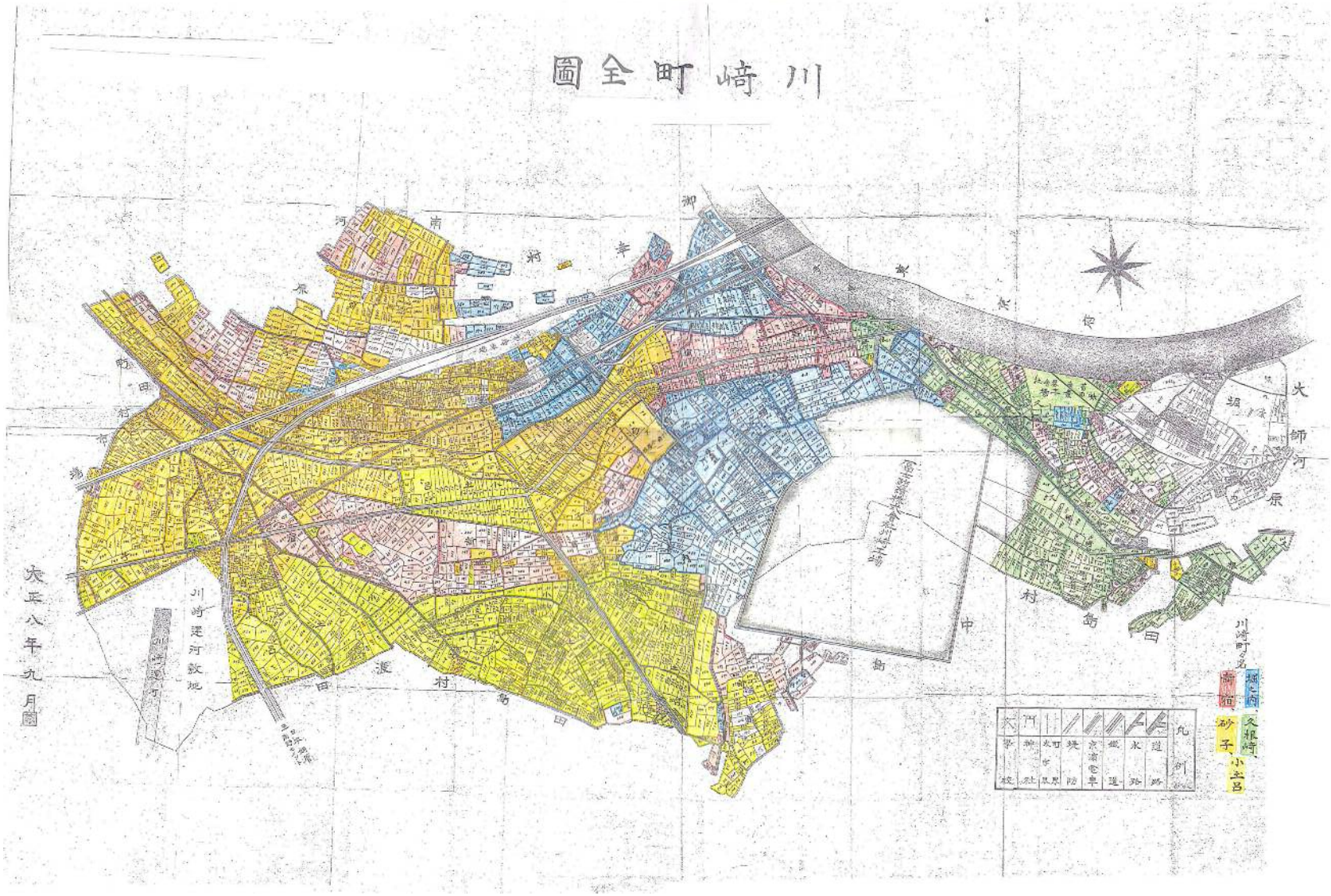
小土呂（こどろ）の地名の由来は、旧多摩川の流れがこの地域に流れ、古川と言った。その流れがこの付近で淀むところから、その緩い流れをトロと呼び、小土呂と付けたものと思われる。多摩区菅に野戸呂（のとろ）がある。字は 9 ヶ所あり、古川通・元木耕地を中心に旧東海道の南に多くの耕地を有している。

古川通耕地（1～29 番地）
元木耕地（30～193 番地）
貝塚耕地（194～387 番地）
見染耕地（388～481 番地）
池田耕地（482～629 番地）
堤根耕地（630～633 番地）
古屋敷耕地（633～768 番地）
東越耕地（769～839 番地）
堤外耕地（840・841 番地）


⑤ 宿裏耕地
① 堤外耕地
⑯ 南河原耕地
⑭ 西原耕地
⑮ 古川通耕地
⑥ 東田耕地
② 蔵後耕地
③ 寺前耕地
⑬ 堤根耕地
④ 寺後耕地
⑩ 元木耕地
⑦ 古屋敷耕地
⑪ 見染耕地
⑫ 池田耕地
⑨ 貝塚耕地
⑧ 東越耕地



川崎宿四ヶ町関係図

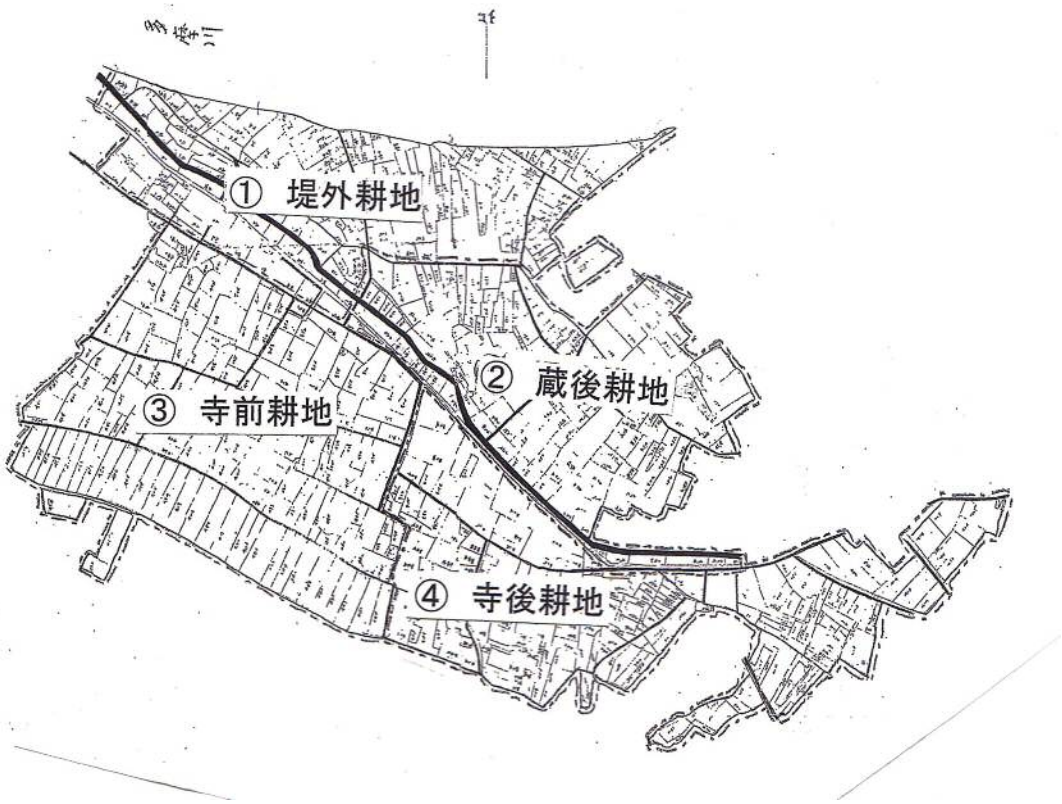

川崎町全圖
大正八年九月調
川崎運河敷地
南河原
幸村
御幸村
中島
大師河原
川崎町名
畑地
砂子、小土呂
田畑
冬根崎
凡例
道路
水路
堤防
京浜電車
堀
橋
門
神社
寺院
学校

①　堤外耕地（テイガイコーチ）

多摩川の旧流路の堤外にあったところから付いた字名、久根崎が大半を占め、一部新宿・砂子の飛地が存在する。享保年間の『久根崎町検地帳』に堤外川下中洲とある。河原の中洲が耕作されて、耕地となったところ。『新宿町検地帳』に堤外耕地は載る。現在の旭町１丁目、港町にあたる。大師道の起点に位置し、旧堤防に沿って二ヶ領用水の大師堀が流れている。

②　蔵後耕地（クラウシロコーチ）

堀之内村の蔵前耕地と対になる字名で、久根崎と新宿で折半している。元禄 10 年の『新宿町検地帳』に蔵後耕地の字名が出てくる。享保年間の『久根崎町検地帳』に郷御蔵とあり、郷蔵が設置されていた、その後という意味か。現在の旭町１丁目、港町、鈴木町の一部にあたる。



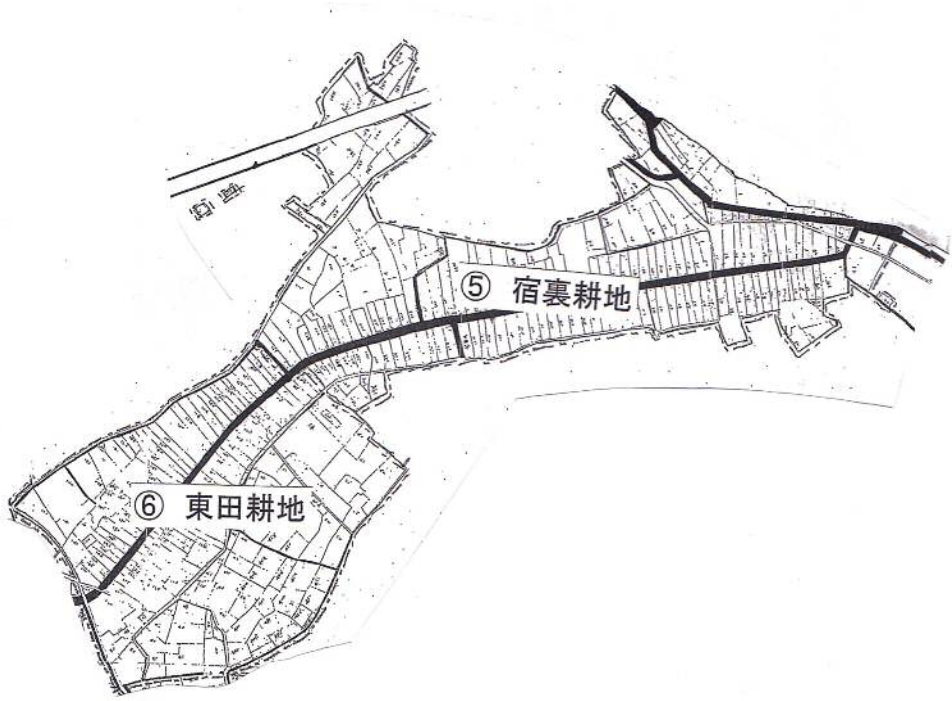
③　寺前耕地（テラマエコーイ）

④　寺後耕地（テラウシロコーチ）

大師道の南側に位置し、医王寺の前・後という意味で、歴史ある寺であるところからこの字名が付いたと思われる。寺ノ前通、寺脇など字名が載る。寺前耕地は久根崎が殆どで、一部新宿の飛地があった。寺後耕地は久根崎が殆どで、一部新宿、砂子、堀之内の飛地があった。寺後耕地は現在の旭町２丁目にあたる。寺前耕地は川崎競馬場を中心とする現在の富士見１丁目にあたる。大師道は医王寺を囲むように南下し左折して大師・平間寺へと続いていた。

⑤　宿裏耕地（シュクウラコーチ）

多摩川に接し、その大半を新宿が占め、街道に面している。いわゆる短冊形の町屋の地割が形成されている。一部久根崎と砂子の町に掛っている。宿に直接面しているのに、宿裏とはよく分からない。元禄 10 年の『新宿町検地帳』に屋敷裏という字名があるが、関係ありか。宿裏耕地に久根崎・新宿・砂子の１番地があり、ここから川崎町全体に番号がふられている。現在の本町１・２丁目、砂子１丁目にあたる。一部駅前本町、堀川町にもあたる。通称地名として稲荷横丁がある。田中本陣跡、助郷会所跡、一行寺、宗三寺、真福寺がある。

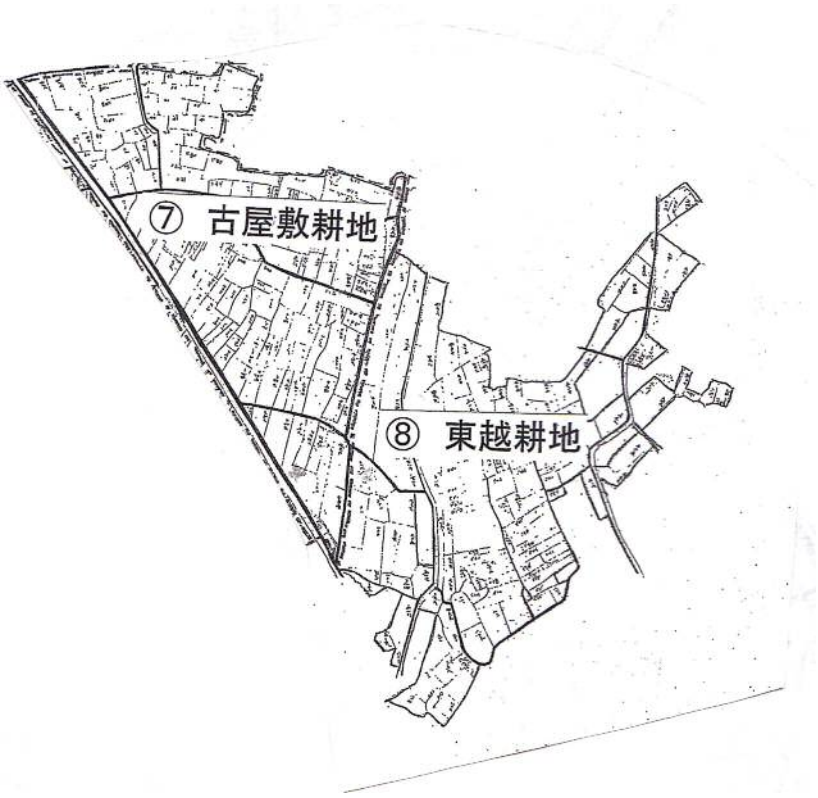


⑥　東田耕地（ヒガシダコーチ）

砂子宿の殆どを占め、東側に新宿の一部がある。現在の砂子１丁目と宮本町の一部、東田町の西側にあたる。この付近に砂子という字名があったため、砂子町と命名されたと考えられる。現在の駅前本町あたりが、南河原村の砂子下耕地と呼ばれていたことからも、この一帯に呼ばれていた地名と考えてよいのではないか。大正 11 年の町名変更で東田町として名が残る。東田耕地 159 番地が佐藤本陣跡である。現在の川崎信用金庫の向側にあたる。現在宮前町にある妙遠寺は、東田耕地にあり小泉次大夫の隠居寺であった。宿場本陣が出来る前は御休所として機能していたようである。また街道沿いに養光寺・佐々木社、大徳寺があった。養光寺・佐々木社の位置に市役所通りが駅前から伸びている。

⑦　古屋敷耕地（フルヤシキコーチ）

新川通の北に位置し、堀之内村の宮前耕地と境をなす。小土呂が広くを占め、砂子・新宿の一部がある。古屋敷とあるが、この地に旧家等の言い伝えは残っていない。現在の東田町の一部、新川通、境町の一部にあたる。

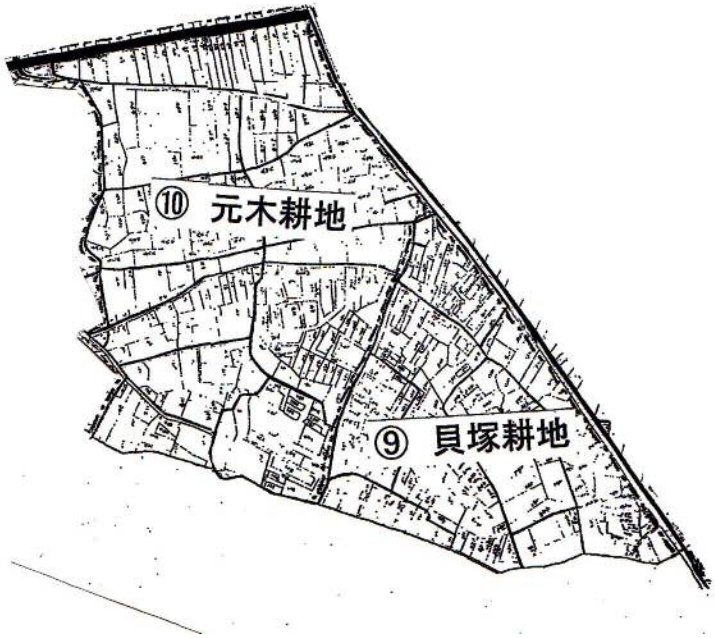


⑧　東越耕地（トーノコシコーチ）

『新宿町検地帳』には東腰耕地とあり、同じところを指すと思われる。新川通の北に位置し、堀之内村の下蒲原耕地と大島村の向耕地と境をなす。二村と複雑に配置され、飛地が多く散在する。小土呂と新宿がほぼ折半している。中島村や大島村の飛地が入り組んでいる。大島村向耕地に江戸時代の小名として遠野越耕地が載ることからも、地続きの呼称として呼ばれていたと思われる。トーノコシは丘陵などの峠を意味する場合が多く、高石村と王禅寺村の尾根境に塔ノ越がある。但し、川崎市でも平地の新城村と上小田中村境に塔ノ越があるので、必ずしも山間部に限ったものでもない。意味は不明だが、村境であることに注目したい。現在の境町、富士見２丁目の一部にあたる。境町という名称に引き継がれたのではないか。

⑨　貝塚耕地（カイヅカコーチ）

新川通の南に位置する。ほぼ古屋敷耕地と向い合う形である。殆どが小土呂で、一部新宿がある。現在の貝塚１・２丁目にあたる。大正 11 年の町名変更で貝塚町ができる。地中から貝殻が出土したところからの地名。波によって貝殻が流れ寄ってマウンドを作った地形。

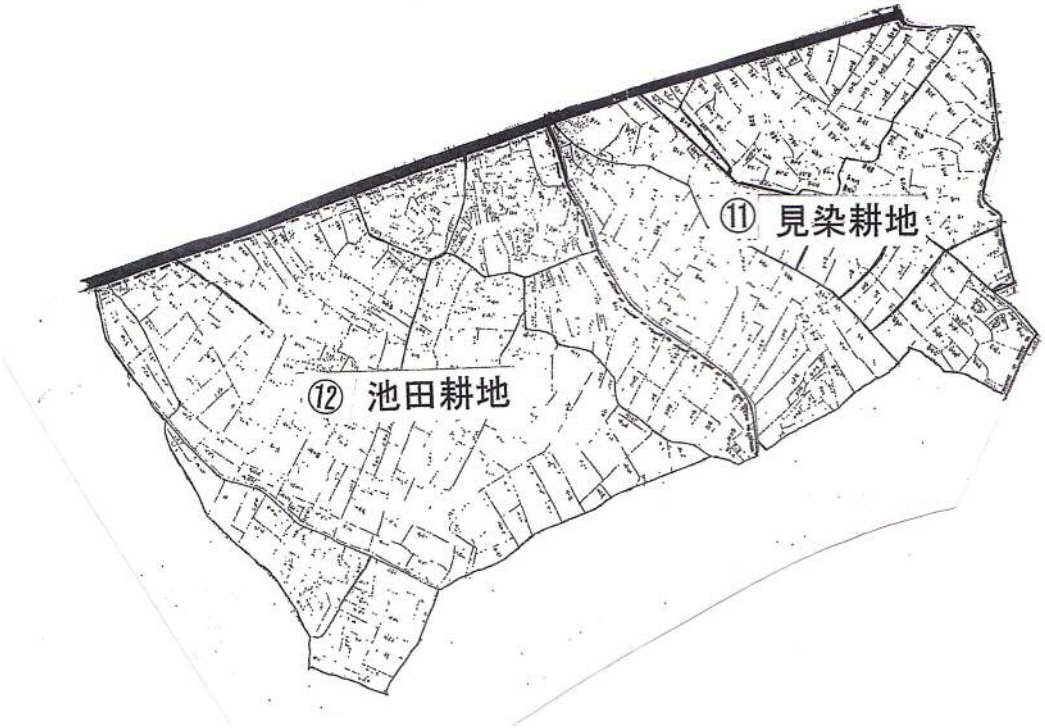


⑩　元木耕地（モトギコーチ）

小土呂宿の東側で新川通の南に位置する。渡田村にも本木耕地がある。宿は短冊状に地割されている。街道沿いが小土呂で、その後に新宿が、さらにその後に小土呂がある。新宿の中に砂子が点在している。本村という意味か。現在の小川町・南町・元木１丁目・貝塚１・２丁目の一部にあたる。小土呂橋は新川堀に架かる橋で、正徳元年に板橋架け替えとあり、享保 11 年田中休愚が石橋に架け替え、寛保 3 年にも石橋を架け替えている。昭和 60 年に小土呂橋交差点の工事現場から寛保の石橋の橋脚が発掘された。寛保 3 年の石橋架け替えについて、川崎年代記録に、「右石橋一ヶ所、寛保二年戌年大水難ニくへ落、懸替御願申上御勘定方浅井七十郎殿・勝屋治兵衛殿見分之上、翌亥年御掛替、御懸り水谷郷右衛門殿、但し其間仮り橋」とある。砂子町小土呂堺とあり、悪水吐堀とある。

⑪　見染耕地（ミソメコーチ）

東海道筋に面して、元木耕地と接する。街道筋は新宿が占め、その後に小土呂がある。字に溝目（ミゾメ）があり、村の中心を用水が通るところから付いた地名。宿の佇まいから見染となったのではないか。現在の日進町、南町、元木１・２丁目にあたる。



⑫　池田耕地（イケダコーチ）

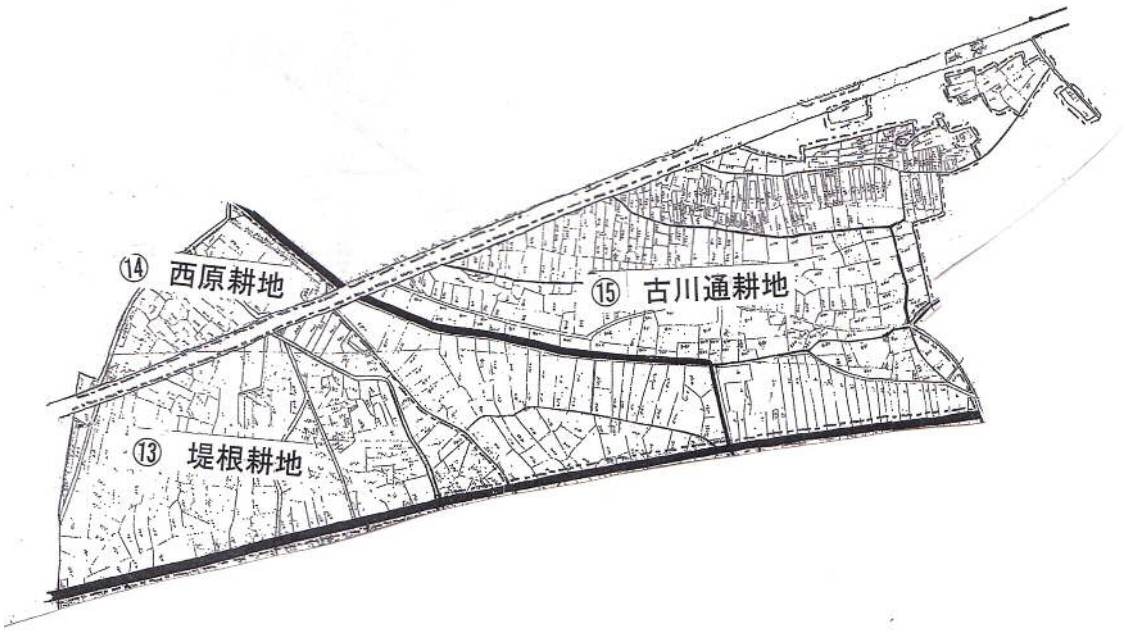
東海道筋に面して、見染耕地と接する。街道を挟んで提根耕地と接し、小土呂が殆どを占めるが、街道の主要部に砂子があり、この付近を八丁畷といい、小土呂宿から縄手道が続いていた。下並木はこの縄手の街道筋に並木があったことを示す。古多摩川の流路の湿地帯についた地名。安永元年（1772）の『川崎年代記録』に「当所沼由来」の項に、右沼小土呂町をこえ、往還通りより池田耕地新宿分、（中略）、何レ地窪之場とある。現在の池田１・２丁目、日進町・下並木の一部にあたる。

⑬　堤根耕地（ツツミネコーチ）

東海道筋に面して、街道を挟んで池田耕地と接する。古多摩川の自然堤防沿いにあり、堤根といった。殆どを砂子が占め、一部新宿がある。現在の下並木、堤根、日進町の一部にあたる。川崎年代記録に、「往還通り縄手之内　新宿町分用水引越シ堀上　従古来四貫橋ト云り」とある。また、提根耕地・池田耕地と市場村村境には二ヶ領用水の二筋の町田堀が流れており、夫婦橋が架かっていた。その橋の表示が近くの塀に埋め込まれている。ここまでを八丁縄手という。

⑭　西原耕地（ニシハラコーチ）

堤根耕地に接し、東海道線の西側に位置する。現在の提根はこの地をいう。本村の西にある耕作地という意味であろう。全てが砂子である。



⑮　古川通耕地（フルカワドーリコーチ）

東海道に面して、街道を挟んで見染耕地、元木耕地と接する。多くを砂子が占めるが、小土呂宿は小土呂町、その他の街道筋は新宿が占める。短冊形の町割が成されているところが宿であり、そこには棒鼻（土居）という宿の境を示す表示があった。そこから鶴見村村境までを八丁縄手という、まっすぐな道が続いていた。現在八丁畷の駅付近にある芭蕉の句碑は本来は棒鼻の近くにあったと考えられる。古川通、上並木、小川町を形成していたが、現在は日進町、小川町にあたる。古多摩川の流れ跡を古川といい、排水路として多摩川に流れ込んでいた。川崎年代記録には、「出口悪水吐堀、御成橋より玉川迄、長千百七拾間、同所より大嶋村海辺之圦まで（新川）、長千百三十七間　秣沼悪水吐キ」とあり、古川と新川の分岐点に御成橋があったことになる。棒鼻の近くに教安寺があり、境には二ヶ領用水の分流が流れ、石橋があった。川崎年代記録には、「新宿分用水小堀上　小土呂町はつれ　土居敷之脇」とある。

⑯　南河原耕地（ミナミガワラコーチ）

東海道線の西側に位置する。南河原村に深く入り込み、現在の柳町、大宮町、堀川町、中幸町にあたる。砂子と新宿の南河原にある耕作地という意味だろう。この一帯は上流部からの用水がまとまり、古来鵜沼という沼があった。その排水地にあって深田や葦原の場所であった。そこを、各町村が耕作してできた土地となる。明治以降工場が進出してくるが、土地が低く水はけが悪く、幸区の加瀬山の一角を崩して盛土してできた町である。

従来の久根崎・新宿・砂子・小土呂については、地区としての考え方に変える必要がある。もし、町と呼ぶのであれば宿場内の町割部分を指すと限定した方が正しいように思う。史料でも新宿分・砂子分などと記載されていることが多い。

久根崎町が大半を占める堤外耕地・蔵後耕地・寺前耕地・寺後耕地は、大師道を挟んで二ヶ領用水の大師堀に沿った地域である。多摩川に接しているため、明治期まで川欠けに合い、耕地が流出するなど地番が欠落していた。

宿裏耕地・東田耕地は川崎宿の中心にあり、渡船場や本陣役所、寺院などが配置されていた。町割が整然となされており、関東大震災以前までは江戸時代と同じ町割であった。震災以後土地区画整理事業により、区画が大きく変更された。

新川通りを挟む形で古屋敷耕地・東越耕地・元木耕地・貝塚耕地がある。多くは小土呂町であるが、新宿町が耕地内に挿入されているのが特徴的である。

街道を挟む形で南に元木耕地・見染耕地・池田耕地、北に古川通耕地・堤根耕地がある。元木耕地と古川通耕地の一部に小土呂宿の町割がある。小土呂宿の境から市場村境までを八丁縄手と呼んだ。その街道筋に上並木・下並木と呼ぶ町があった。現在の下並木は提根耕地にあたる。小土呂町が南側、砂子町・新宿町が北側を多く占める。

東海道線の北側に位置するのが、西原耕地・南河原耕地である。旧多摩川の流路跡の低湿地を切り開いて耕作地とした。砂子町・新宿町が占める。

なぜ、このように複雑に町村の耕地が入り込んでいるのだろうか。川崎市史やその他関係史料によく記載されているように、川崎宿は間の宿といわれ、江戸から近く宿場を維持運営するのが非常に困難であったという。しかし、負担は他の宿場と変わらず。助郷など馬や人足の手配も怠ってはならなかった。このようなことから、渡し場の権利を川崎宿が持つようにするなど改革も行われてきた。水害や火災による被害もたびたびあった。こうした中で、可能な耕地を求めて、湿地や荒地を耕して自分の町の耕地としていったのではないか。

南河原村の字名

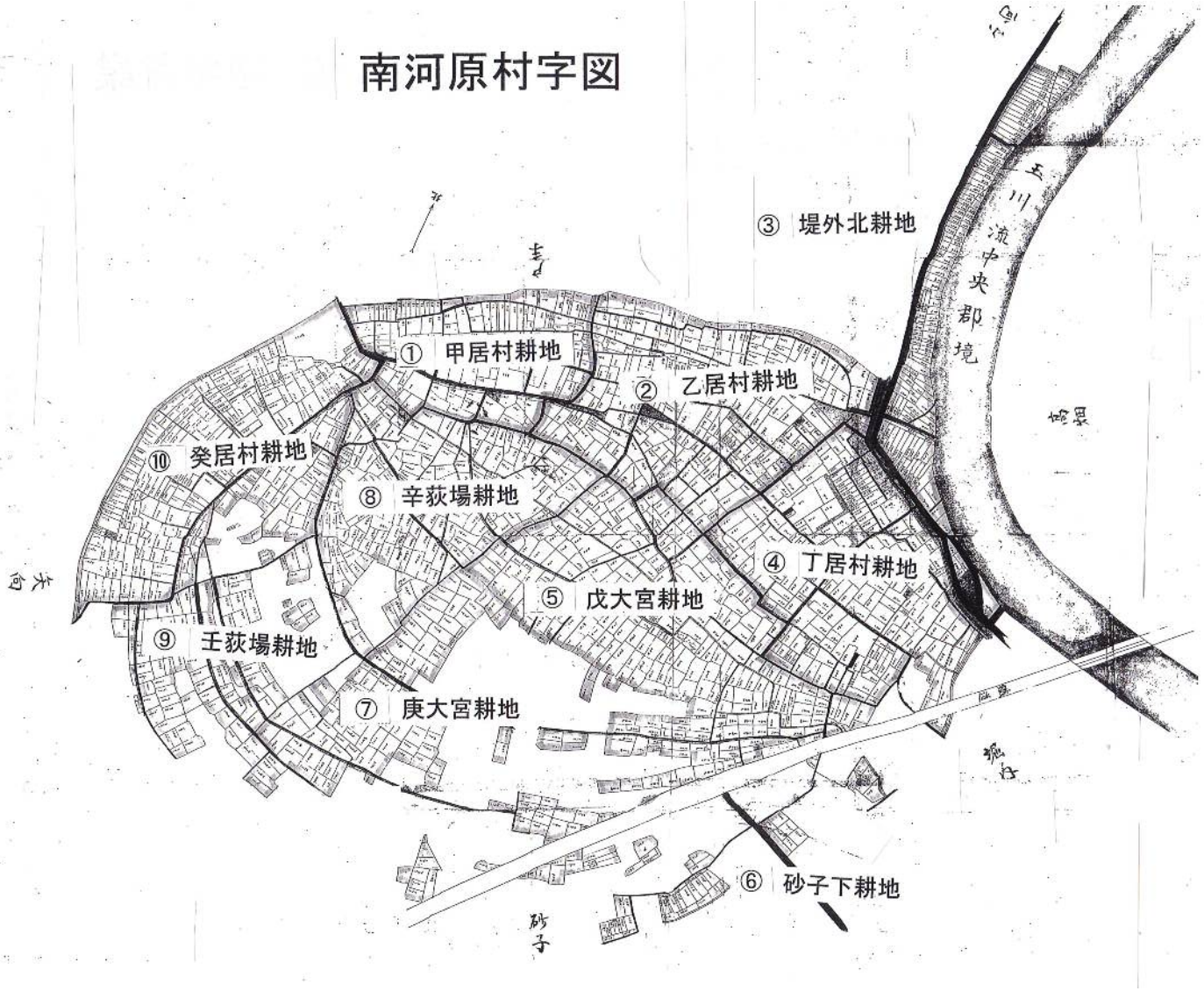
南河原村の形成に関してはほとんど資料が存在しない。多摩川の流路が一定せず、南河原付近から南下して現在の鶴見川や新川などに流れていた時期もあった。渡田村の天飛川（テンピガワ）も多摩川の旧流路と言われている。南河原村の地形図を見ると多摩川と鶴見川に挟まれて丸く円を描くような地形になっているのが特徴的である。まさにこれが、多摩川の流路が形成した地形である。天正年間にほぼ今の流れに近い流路になったようで、江戸時代になって開発の手が入った。古資料によると、多摩川が蛇行して荏原郡八幡塚村の耕作地の時代もあったところから、南に位置する河原にできた村ということになる。

明治 22 年の町村制により、日吉村字南河原になる際、それまでの南河原村の大半に堀之内、新宿、砂子、矢向の飛地が編入されて南河原が構成されたとある。（角川地名辞典）
法務局に字図があるのではないかと閲覧させてもらったが、大正 11 年の町名変更後の資料しかなく、確認できなかった。そこで、現在入手している耕地整理のための周辺村から関連資料をつなぎ合わせて可能な限りの再現を試みた。

大正８年頃作成されたと思われる、南河原村地籍図にある地番を整理してみると、
甲居村耕地（1～174 番地）
乙居村耕地（175～420 番地）
堤外北耕地（421～579 番地）
丁居村耕地（580～810 番地）
戊大宮耕地（811～1100 番地）
砂子下耕地（1101～1162 番地）
庚大宮耕地（1163～1291 番地）
辛荻場耕地（1292～1468 番地）
壬荻場耕地（1537～1562 番地、2469～2536 番地）
癸居村耕地（1563～1869 番地、1874 番地）

調査にあたって、いくつかの証言をいただいた。南河原村は中心となる村の構成が辻子（ずし）と呼ばれる集落で運営され、河原辻子・中辻子・原辻子の３村落とそこにはそれぞれに鎮守となる社があった。女体神社については惣鎮守であるが、川の流路の変遷など、また史料が焼失するなどして不明のことが多いという。蒲田の八幡塚村の八幡神社が惣鎮守であった時期もあったとも言う。現在都町にある宝蔵院に伝わる「雨乞い獅子」について、南河原村内だけでなく、堀之内村の山王宮の社地内でも獅子舞を行っていたという。関東大震災以降行われなくなったことが、昭和 49 年の文化財調査で分かった。このことからも、江戸時代を通じて、南河原村と堀之内村・川崎宿とは村落構成の上から深く関わっていたと思われる。個々の字については以下のようなことがわかった。

南河原村字図


③ 堤外北耕地
五川流中央郡境
① 甲居村耕地
② 乙居村耕地
⑩ 癸居村耕地
⑧ 辛荻場耕地
④ 丁居村耕地
⑤ 戊大宮耕地
⑨ 壬荻場耕地
⑦ 庚大宮耕地
⑥ 砂子下耕地

①　甲居村耕地（コーイムラコーチ）

現在の都町と南幸町１丁目の一部にあたる。また、北の一部は神明町２丁目となる。居村とは、村の中でも人家の多いところに付く地名で、甲居村耕地以外に、３ヶ所居村耕地がある。戸手地区の耕地整理計画図に甲居村耕地が記載されている。都町に延命寺がある。新編武蔵風土記稿には宝蔵院とあり、延命山円明寺と号した。後に山号を寺号に変え、現在は延命寺という。荏原郡高畑村宝幢院の末寺ということから、荏原郡との関係がうかがえる。都町の命名の由来は明らかでない。

②　乙居村耕地（オツイムラコーチ）

現在の中幸町１～４丁目付近と北の一部は河原町となる。神明町から河原町のかけての緑道は砂利運搬や東京製鋼の引き込み線路跡で、川崎河岸駅があった。戸手地区の耕地整理計画図に乙居村耕地が記載されている。集落より田圃の面積が広い地域。北側に集落があったが、この集落を中辻子と呼ばれた。中幸町３丁目に圓眞寺があり、慶長年中に蒲田嘉左衛門が中興開祖という。この時より圓眞寺と呼ぶという。この蒲田氏は荏原郡に所領を持つ後北条氏の御家人である。

③　堤外北耕地（テイガイキタコーチ）

多摩川に沿って河川敷にあった耕地で、現在は戸手４丁目となる。河川の大水の度に耕地が削られ、江戸中期に田中休愚により堤防の改修が行われ、現況に近い形態になったと思われる。堤外北耕地の字名は昭和 46 年の川崎市町名資料に載っている。

④　丁居村耕地（テイイムラコーチ）

乙居村耕地及び堤外北耕地に接し、多摩川が北に位置する。現在の幸町１～４丁目及び堀川町の一部にあたる。旧村内では最も古くからの集落のある所で、自然堤防上に立地するため、人家の集中が見られる。この付近を河原または河原辻子とも呼ばれた。堀川町の旧明治製菓跡付近に本随寺があった。現在は廃寺となって存在しない。

⑤　戊大宮耕地（ボオーミヤコーチ）

中幸町３・４丁目の一部と堀川町にあたる。大宮の地名については分からないとしているが、南河原村の総鎮守の女体神社があることから、各地の大宮地名から推論して、大宮と付いたと考えることができる。昭和 60 年代の川崎駅構内工事図面に南河原字戊大宮耕地と記載されている。東芝堀川工場跡地に商業施設ラ・ゾーナが進出し、川崎駅西口が大きく変貌し、人の流れが変わった。

⑥　砂子下耕地（イサゴシタコーチ）

東海道本線の東に位置し、堀之内村の南河原耕地や川崎町の古川通耕地の中に飛地としてある。砂子下の地名は、砂子町に隣接し、砂子の下に位置するところから付いたと思われる。地籍図では砂子下と記載され、区別している。昭和 60 年代の川崎駅構内工事図面に南河原字砂子下と記載されている。川崎駅南口付近もその一部で、現在の駅前本町にあたる。砂子下耕地の字名は昭和 46 年の川崎市町名資料に載っている。

⑦　庚大宮耕地（コウオーミヤコーチ）

現在の大宮町にあたり、川崎駅の北側に位置し、地籍図に大宮と記載されており、砂子や新宿の南河原耕地と区別している。昭和 60 年代の川崎駅構内工事図面に南河原字庚大宮耕地と記載されている。工場関連跡地にミューザかわさきが建設され、「音楽のまち・川崎」の中心施設として川崎市民のみならず、全国の音楽に関心のある人に注目されている。

⑧　辛荻場耕地（シンオギバコーチ）

現在の南幸町１・２丁目付近にあたる。元諏訪神社付近で原耕地または原辻子とも呼ばれた地域である。湿地で荻が茂っていたところから付いた地名というが、荻場ということから入会地で草刈り場であったとも考えられる。

⑨　壬荻場耕地（ジンオギバコーチ）

現在の柳町にあたり、新宿・砂子の南河原耕地と接する。両荻場耕地内に地番が特定できない空白地域がある。いろいろ資料をあたったが分からない。一つの考え方として、矢向村飛地があったという、矢向村地籍図（昭和７年）には記載がないので、それ以前に村域を変更したものと考える。壬荻場耕地は（1537～1562 番地、2469～2536 番地）となっているが、これは明らかに記入ミスで 1469～1536 番地、1537～1562 番地でなければならず、なぜ 2000 番台にしたのか謎である。

⑩　癸居村耕地（キイムラコーチ）

現在の南幸町３丁目付近にあたる。国道１号線の西に位置し、横浜市鶴見区矢向に接する。西南の角に南武線尻手駅がある。また、中央に川崎市南部市場がある。他の地域よりやや高地にあり、早くから開けた地域で、居村の地名が付く。

南河原村には居村耕地が４ヶ所、大宮耕地が２ヶ所、荻場耕地が２ヶ所となり、便宜上甲・乙などと番号をふったもので、干支の位置関係を示すものではなかった。早くに現在の町名に変更していたため、個々の字図が現存せず、字の境界が未確定であるが、地番の配列から推測すると、今回の線引きが妥当と考える。今後の研究に待ちたい。

川崎町の町名変遷表

住居表示年・区域変更

川崎町	明治22年町村制	字地番	T13年川崎市		耕地整理			区画整理・町名変更		S47年区制	平成24年現在
荏原郡八幡塚村	蒲田村	八幡塚雑色向洲、堤外耕地	T2	橘樹郡に編入	S12.12.10	すずきちょう鈴木町				S47.8.1	すずきちょう鈴木町
		八幡塚六郷堤外、堤外耕地	M45	橘樹郡に編入	S12.12.10	みなとちょう港町				S47.8.1	みなとちょう港町
久根崎町	川崎町	蔵前耕地	T13.6.25	あさひちょう旭町1丁目						S47.8.1	あさひちょう旭町1丁目
		堤外耕地・寺後耕地、中島蒲原耕地、須ヶ原耕地	S3.5.1	旭町2丁目						S47.8.1	旭町2丁目
新宿町		宿裏耕地	T13.6.25 T13.6.25	ひがし東3丁目 東2丁目					S39.11.11	ほんちょう本町1丁目	ほんちょう本町1丁目
		堀之内川下耕地	T13.6.25	東1丁目			堀川町一部		S39.11.11	本町2丁目	一部 S47. 8.1 本町2丁目
		堀之内川下耕地、宿裏耕地・古川通耕地、南河原砂子下耕地	T13.6.25	ほりかわまち堀川町			堀川町一部		S39.11.11 S39.11 廃止	えきまえほんちょう駅前本町 堀川町	えきまえほんちょう駅前本町
		下蒲原耕地・下宅地耕地・古屋敷耕地一	T11	えのきちょう榎町	S14.3.10	えのきちょう榎町				S47.8.1	えのきちょう榎町
堀之内村		堀之内上宅地	T11	ほりのうち堀之内					S39.11.11	ほりのうちちょう堀之内町	ほりのうちちょう堀之内町
		中島富士見耕地・蒲原耕地、久根崎町寺前耕地 東越耕地、大島向耕地、中島富士見耕地	S3.5.1	ふじみちょう富士見町	S14.3.10	ふじみこうえん富士見公園				S47.8.1 S47.8.1	ふじみ富士見1丁目 富士見2丁目
		宮前耕地・下蒲原耕地	T11	みやまえ宮前	S11	みやまえちょう宮前町				S47.8.1	みやまえちょう宮前町
		下宅地・宮前耕地	T13.6.25	みやもとちょう宮本町					S39.11.11	みやもとちょう宮本町	S47.8.1 みやもとちょう宮本町

		東田耕地、宮前耕地	T11	ひがしだ 東田	S11	ひがしだちょう 東田町		S39.11.11	ひがしだちょう 東田町	S47.8.1	ひがしだちょう 東田町
砂子町		宿裏耕地・東田耕地	T13.6.25	いさご 砂子1丁目			堀川町一部	S39.11.11	いさご 砂子1丁目		いさご 砂子1丁目
		東田耕地	T13.6.25	砂子2丁目				S39.11.11	砂子2丁目		砂子2丁目
		古川通耕地・堤根耕地 古川通耕地 見染耕地	T13.6.25 T13.6.25 T11	ふるかわどおり 古川通 かみなみき 上並木 みそめ 見染				S39.11.11 H4.7 廃止 S39.11 廃止 S39.11 廃止	にっしんちょう 日進町 古川通 上並木 見染		にっしんちょう 日進町
小土呂町		元木耕地・見染耕地	T11	みなみまち 南町				S39.11.11	みなみちょう 南町	S45.7.1	みなみちょう 南町
		古川通耕地・元木耕地	T13.6.25	おがわちょう 小川町				S39.11.11	おがわちょう 小川町	S43.11.11	おがわちょう 小川町
		池田耕地	T13.6.25	いけだちょう 池田町				S40.7.1 S40.7.1	いけだ 池田1丁目 池田2丁目		いけだ 池田1丁目 池田2丁目
		堤根耕地・西原耕地・古川通耕地	T13.6.25	つつみね 堤根							つつみね 堤根
		堤根耕地	T13.6.25	しもなみき 下並木							しもなみき 下並木
		貝塚耕地 元木耕地一部	T11	かいづか 貝塚						S45.7.1 S45.7.1	かいづか 貝塚1丁目 貝塚2丁目
		古屋敷耕地	T11	しんかわどおり 新川通						S47.8.1	しんかわどおり 新川通
		元木耕地・見染耕地・池田耕地	T11	もとき 元木						S45.7.1 S45.7.1	もとぎ 元木1丁目 元木2丁目
		東越耕地・富士見耕地・古屋敷耕地一部	T11	さかいまち 境町						S47.8.1	さかいまち 境町

南河原村の町名変遷表

川崎の町名変遷	明治22年	字	大正13年 川崎市			S47年区制	平成24年現在
みなみがわら 南河原村	御幸村	甲居村耕地	川崎市南河原	S13.8.10	みやこちょう 都町		みやこちょう 都町
		乙居村耕地		S8.4.1	さいわいちょう幸町1丁目		さいわいちょう 幸町1丁目
		丁居村耕地		S8.4.1	幸町2丁目		幸町2丁目
		丁居村耕地 （戊大宮耕地）		S8.4.1	幸町3丁目		幸町3丁目
		丁居村耕地		S8.4.1	幸町4丁目		幸町4丁目
		乙居村耕地		S8.4.1	なかさいわいちょう 中幸町1丁目		なかさいわいちょう 中幸町1丁目
		丁居村耕地		S8.4.1	中幸町2丁目		中幸町2丁目
		戊大宮耕地		S8.4.1	中幸町3丁目		中幸町3丁目
		戊大宮耕地		S8.4.1	中幸町4丁目		中幸町4丁目
		甲居村耕地・癸居村耕地		S8.4.1	みなみさいわいちょう 南幸町1丁目		みなみさいわいちょう 南幸町1丁目
		庚大宮耕地		S8.4.1	南幸町2丁目		南幸町2丁目
		辛荻場耕地・壬荻場耕地		S8.4.1	南幸町3丁目		南幸町3丁目
		戊大宮耕地、辛荻場耕地、砂・南河原耕地		S8.4.1	やなぎちょう 柳町		やなぎちょう 柳町
		戊大宮耕地、砂・南河原耕地		S8.4.1	おおみやちょう大宮町		おおみやちょう 大宮町
		堀之内川下耕地、南河原耕地、丁居村耕地、戊大宮耕地	T13.6.25 ほりかわちょう 堀川町		S39.11一部変更（現川崎区側分離）		ほりかわちょう 堀川町

まとめ

30 年前、日本地名研究所が発足し、地名保存や啓蒙活動を通じて、各地で調査活動が活発に行われた。そのような中で、川崎市でも悉皆調査が行われ、初期の報告文書として『川崎地名考』が出ている。何編にも項立がなされ、史料の発掘に調査員は川崎市内を分担しその発掘発見に汗した。それら史料をもとに、『川崎の町名』『川崎地名辞典上・下』が発刊された。

しかし、その過程で今回報告する『川崎町及び南河原村』の字名について、確定した資料が不明のまま経過していた。その部分を先輩諸氏が探し出した史料を基に、報告できることを喜びとしたい。なぜ、分析できなかったかも、少し分かってきた。

川崎町が江戸時代に街道として再編されたことや村支配が一つでなく、また新たな町割は明治以降も進まず、関東大震災以降の耕地整理まで続いたことにある。他地域の街道宿場の字地番等を調べた訳ではないので、結論は出せないが、少なくとも川崎宿においては、宿本体の町が周辺地域を開発し、関係役所に報告し自分の町村の所有としたということである。

明治初期の堀之内村及び久根崎町・新宿町・砂子町・小土呂町の字図が現存していたこと。その分析は他の村の字図とは記載内容が違い、理由は分からないが十分に検討がなされなかった。そのため、検地帳などの字名史料の記載に留まったとも考えられる。また、地籍図は地番と面積は記載されているが、通常小字等記載されておらず、他の資料とのつき合わせなど相当に検討する項目が出てくる。全市の内容を全てこなすには、物理的に無理であったのであろう。

個々の内容については本文に書いたので、ここでは堀之内村と川崎町との関係、南河原村との関係について触れてみたい。明治初期の地図では集落は街道沿いや山王社、南河原村居村耕地などに限られており、他は村道や用水路に沿ったところに見られ、江戸期とさほど変わっていないように思われる。堀之内村の飛地は多くはないが、川崎町や南河原村、大島村、中島村等周辺の村にある。これは、他の村の飛地が堀之内村内にあることとも共通する。飛地を出村と呼んで、通称地名となっているところもある。南河原村は川崎町に最も近く、日常的な交流があり、川崎市の成立時に川崎町と御幸村、大師町と対等合併に結びつく要因となった。合併時の堀川町、昭和 8 年の大宮町・柳町の成立で、今日の南河原の町が確定するのである。

明治初年にできた字名は一般には使われることが少なく、土地の登記や耕地整理など、限られた場面でしか登場することがない。地域や家族間で部分的に使われていたため、知っている人が少なく、聞き取り調査では曖昧なまま記録されることになる。今回も、字の記載に間違いがあり、最終資料から確定したという経過があった。字図・地籍図は土地の基本図で場所の特定など重要な根拠となる資料である。名称としての地名とは必ずしも馴染みとはならないが、町名の改編などでは根拠となる資料に位置付けられる。今回分かった字名で現町名になっているものは数例にすぎない。

最後に、今回の調査にあたって、川崎市市民文化室、横浜法務局川崎支所に資料検索の協力をいただきました。また、三輪修三氏の『東海道川崎宿とその周辺』、市民ミュージアムの『川崎宿関係史料』を活用させていただきましたこと、御礼申し上げます。

使用した主な資料

東海道川崎宿全体之図	川崎市民ミュージアム
川崎町・堀之内村各字図	日本地名研究所
川崎町全図（大正８年）	日本地名研究所
南河原村全図	日本地名研究所

参考文献

川崎市史　通史編・資料編	川崎市
東海道川崎宿とその周辺	三輪修三
川崎宿関係史料（一）（二）	川崎市民ミュージアム
川崎の町名	日本地名研究所
川崎地名辞典　上・下	日本地名研究所
川崎地名考	日本地名研究所

川崎町と南河原村の字名

2013（平成 25）年３月　発行

編集　日本地名研究所

TEL 044-812-1106

発行　川崎市

川崎市川崎区宮本町１

TEL 044-200-2111